
チョコレート

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコレート

【Nコード】

N5414U

【作者名】

午雲

【あらすじ】

僕の名前は瞬。自称・親友の田村クンと違って、僕には知り合いの女の娘が、居ないわけではないのだけれど、！。

マンガでは、高校生でも、普通に恋愛してるけど、
現実とは、というと、そんなに甘くない。

気持ちは有るけど、恥ずかしさが先に立って、とても話しかけれない。

なので、僕は、彼女居ない歴十七年、

ポスターのアイドルを眺めて、勝手に浸って居る。

そんな僕に運が向いて来たのか、

クラスメートの女の娘が、

突然、僕の宅の隣りに引っ越して来た。

男兄弟しか居ないので、もうしゃべれるだけで、うれしい。

「せっかく隣り同士になったんだから、一緒に学校行こうよ。」

と、彼女の方から誘って呉れたのだから、ラッキーだ。

ただし、僕のキャラは消極的として有名なので、

誰も彼女、佐藤さんと付き合いだしたとは、見て呉れない。

飽くまで「ついで」だと思われて居る。

そこが哀しい。

「近所付き合いよ？近所付き合い。」

「・・・はい。」

佐藤さん自身も、僕に念を押してくる。

その割りには、よく向こうから誘ってくれる。

「カップルじゃないと行きにくい場所って多いでしょ？」

「・・・うん。」

「だからよ。」

必ず理由を言ってから出掛ける。

なので、デートってゆう気分がしない。

「だって瞬クンは、マンガとかアイドルとかが好きなんでしょう？」

「へ？」

「瞬クンのお母さんが言ってるのをウチのママが聞いて、それを私、聞いたもの。」

「・・・」

本当だから、言い返せない。

「その方が、かえって私も気が楽よ。」

「どうして？」

「まだ、彼氏なんて欲しくないもの。」

「そうですか。」

僕は、その告白に、苦笑い。

でも、なにげに名前で呼んでくれるのは、かなりうれしい。

「瞬クンって澄ましてると普通なんだけど、しゃべるとイマイチなのよね。」

「・・・よく言われる。」

「だから、そのまま澄ましてて！俳優になった気分で。」

「うーん。」

難しい注文だった。

コンサートだったり、

野球場だったり、

映画だったり、

デートの場所は、佐藤さんの気分によって様々だったけれど、
帰りは、きつと、オシャレな喫茶店だった。

話題は、その日の事を話して居れば好いから、困らない。

純粹にお隣りさん兼アクセサリー代わりと思って居るようだ。

「いいなあ、喫茶店って、やってみたいんだ、私。」

ココアを飲みながら、彼女がいう。

「ねえ、瞬クン。」

「うん？」

「・・・喫茶店のやり方って知ってる？」

「さ、さあ？」

「やっぱり知らないか。」

「う、うん。」

「ほんと頼りにならないわね・・・」

（グサッ）

一緒に頼んだココアを、僕は、こぼしそうになる。

でも、ウソは吐けない。

「ひとそれぞれに趣味ってあると思わない？」

（・・・あります。）

僕も、ひそかにうなづく。

「自分の趣味を表現して他人に見てもらおうのよ！こんな風にー。」

彼女が自分の席から店内をぐるりと見回す。

カップに口つけながら、僕もとっさに舌を動かす。

「やっぱり味じゃない？何より大切なのはー。」

（！？）

「あのね、夢をこわさないで呉れる？瞬。」

「は？」

「喫茶店はお腹が空いてるヒトは来ないの！」

「・・・そうかなア。」

「ーったく！」

（グビ）

彼女は、ひと息に、ココアを飲み干してしまう。

「ゴメン・・・ここは僕がもつよ。」

おずおずと申し出ると、

「いいわよ。私が誘ったんだから！」

ピシヤリと彼女が言い返す。

実際、今まで一度も支払った事が無い。

いつも佐藤さんにおごってもらってばかり。

変に義理堅い処ろに、

かえって距離を感じる。

健康な男女がふたりきり・・・

しかも高校のクラスメート・・・

何かドラマがあってもイイはずなのに・・・

でも、その日以来、

僕のコトを、

「瞬。」

と呼んでくれるようになったのは、かなりうれしかった。

佐藤さんと僕とが連れ立って、あちこち出歩いて居るコトは、間を置かず、校内の噂となった。

昼休みー

自称・親友の田村クンがいう。

「今年こそは絶対、バレンタインのチョコ、もらっぞーっ！」

「まだ夏だよ？田村クン。」

「うっせい、佐藤が居るからって余裕かますなよ？瞬。」

「え？」

「おれの目はお見通しだぜ？お前たち、ただの友達だろ？」

「・・・」

僕は、わざと聞こえ無いフリをする。

典型的なモテナイ君・・・

その田村にまで、こう言われるのだから、

ちよつと考え直した方が好いかも知れない。

「でも、まだイイよな？」

「・・・何が？」

「・・・可能性が有るだけサ・・・」

（はゝあ）

田村クンが、うなだれて、そつと溜め息をつく。

「ポスターの中の女の娘は返事してくれないからな。」

「・・・ギャグか？田村。」

「あ、なんだ、そのさげすんだ目線はー？」

「あれ？」

「にやろうつ同類のクセにつ」

「勝手に決めるなっ」

（・・・可能性だけは、か・・・）

田村クンに胸倉を掴まれながら、

僕は全然、別の事を考えて居た。

次の日曜日。

夕方になるのを待って、

僕たちは浴衣姿、

ふたりそろって、夏祭りへと出掛ける。

出店で買い物したり、

花火を見物したり、

夏の夜のにぎわいに思い切り身を任せた、

その帰り路・・・

例のように、立ち寄った喫茶店で、

「さて、何飲もうかな？」

彼女はメニューをみて、

「あ、アイスココアでいい？ 瞬。」

（・・・）

お約束な、その台詞に、

「いや。」

僕は、初めて、首を横に振った。

「アイスコーヒーにする。」

「高校生はコーヒー飲んじゃいけないんだよ？」

（未成年）

そう注意する彼女へ、

僕は、独り言のように聞き返す。

「ココアってチョコレートだろ？」

「それがどうしたの？」

彼女は、はてな顔。

「・・・」

僕は、口をつぐむ。

まさか今頃から、

あの日のコトを意識して居るなんて、

恥ずかしくて、とても言えない。

そこへタイミングよく店員さんが寄って来て、

みずから僕が告げる。

「アイスコーヒー、ブラックで！」

（！？）

「え？」

佐藤さんはビックリして、僕の顔を見返す。

注文の品が来て、彼女が口を切る。

「飲んだコトあるの？瞬。」

「いいや。」

「・・・すごく苦いと思うよ？それって。」

ちよつと首を伸ばして、

グラスの中身をのぞきこむ仕草。

「・・・いいんだ、苦いほうが・・・」

(？)

彼女はストローを口にくわえて、

しばらくの間、

目をぱちくりさせるばかり。

「何考えてんだか・・・」

花火の絵をあしらった、うちわを片手にして、

彼女は、やがて、あきれたように、

ひと言、そうつぶやいたのだった。

(おしまい)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414u/>

チョコレート

2011年10月5日14時59分発行